

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
（毎月一回、十五日発行）

（通第一二七号）

慈

光

第十一卷

第十號

目次

正信偈私解……………	白井成允……………(19)
雲霧と暁……………	榊原徳草……………(16)
迷を恐るる或青年に……………	波岡茂輝……………(12)
善知識を訪ねて……………	福島政雄……………(9)
繫縛と解脱(一)……………	近角常観……………(1)

繫縛と解脱(二)

近角常觀

十 我が身の罪業に気づいたが信心にあらず

さて斯く言うと、直ぐ皆様は、又「斯くくゝられてると諦めたのが信仰である。して見よう無き身と分つたのがお慈悲である」といふ風にとらるる。そうではない。そのくくられ、善くなれない奴である故に、その者に遣る瀬なき広大なお慈悲で向うて下さる。その仏のお慈悲を頂かぬことには何もならぬのである。

よく多くの人は、今言う「人生に於いて、自分の心を知つてくる者は誰ひとり無い。もうこの者を助けて下さるは仏故、仏にしがみつくとほか無い」と言われる。処が計らんやこちらがしがみつくとより前に、既に、五劫永劫の昔に於て仏はかねて我々の今日あることを知ろし召し、我々がもうして見ようなき心淋しき此の胸中を御覧下され、……

……『信巻』の仰せには
一切の群生海、無始より己来、乃至今日今時に至るま

で、穢悪汚染にして清浄の心無く、虚仮詭偽にして真実の心無し。……

我々平素綺麗そうな事を口にして居るが、我々のするごと、言うことは、皆偽りである。我々の本当のどこを言うかと、我々は無始よりこのかた、今日今時に至るまで、本当の真実、本当の清浄というものは微塵もなく「うそ」「偽り」「穢れ」「罪悪」の塊りである。そう云う我々として見れば、我々はもう闇である。闇故、そのような者は仕方がないと、其の闇の儘で捨て、置くことのお慈悲では無い。

即ち、『信巻』の次の文には
是を以て如来一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議光戴永劫に於て、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修一念一刹那も清浄ならざることなく、真心ならざることなし。

即ち、其の如き、出来ぬことを仕ようと思つて苦しみ、脱

る可からざる業報を脱れたいと悩み悶えている……或は人が気の毒だというては人を助けたいと苦勞し、又人を頼みにしては人があてにならぬと歎き、善きにつけ、悪しきにつけ、又自分につけ、人につけ、常に悩み苦しんで居る我々を、十方衆生と呼びかけて下された仏は、縦に三世を貫き、横に十方を御照覧の仏故、我々の何もかも仏は皆御存知下されてある。

御存知故、その哀れなる様が、不慮でしようが無い。冷淡なる事は言つて居られぬ。是を以てか十劫正覺の昔、仏は私のかくの如く悪しき、浅間しきを皆知り抜いて、よくもく之に呆れもしたまわず、この厭うべき奴を飽く迄見捨てぬとお慈悲が、たまりくつて今日大悲の親様と現われ

「汝の苦しきも、汝の衝き當りて動けぬ事も、汝の得意も、汝の失意も皆見とらして、其のため斯く心を悩まし待ちうけて居る親故、この親をたのめと、我の方から要求するので無い。斯く汝の悪しき思いの隅々まで知り抜いて、その汝を飽くまで見捨てぬ、此の親の心を得てくれよ」

と、遣る瀬無く向うて下さる大悲の仰せなのであります。

十一、よくもくこの奴を

昨夜も、或方の処でお話すると、……其の方は、この

夏の求道会の時、著しくお喜び下された方であるが、……其の方の御一子が宮仕えをしてお出でになる事に就き、もうこの三ヶ月ばかりお遇いになるうと思つても、遇う事が出来ぬ。「それにつけても、此のお慈悲一つを、娘に知らせ度いと思つ。娘の行末のため、どうかこれ一つは知らせて置き度いと思つ」と話されたにつきても、申したのであります。

「あなたがこれ程までに知らせ度い／＼と思いなさると同様に、大悲の親様も同じく、この吾が親心をあなたに知らせ度や／＼にて、長き遣る瀬なき御方便があつたのである。して、この場で知らそう、此席で気がつくかと、まんじりとせず待ちうけて下された御念力一つで、

ここに祖師聖人の化導により、法蔵因位の本誓を聞く、歡喜胸にみち、渴仰肝に銘ず……(式文)と仰せられたと同様に、頂く事を得たのである」と申したことであります。

さてして見ると、最早や頂く所は外には無い。我々今日あゝ、こうと思つてるのであるけれども、我々の兎や角の思いで行ける位ならば、弥陀の本願は要らぬ、自力で充分足りるのである。けれども我々は何れの行も及ばぬ、何の思いも間に合はぬ。……『歡異鈔』のお示しには

煩惱具足の我等は、いつれの行にても生死をはなるこ

とあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。

私共到底、何程困えても思うよう出来ぬ。善くならぬ。斯く我々の、恰も箱に入つた具合で、一分一厘動かれざる仕て見ようなき者なる事を、仏かねてお見抜きなされてゐる。

……茲で注意すべきは「我々は斯く自分で一分一厘動けぬ、斯く動かれざる事を知らせて貰つたのが唯事でない」「何事も前生の因縁であると分かせて貰つたのがお慈悲である」という。そのようなお慈悲では、甚だ心淋しきお慈悲である。そうぢや無い。その一分一厘動けぬ私の、その動けぬ仏を仏かねて哀れみて下されて

「あゝ如何にも汝は不自由で有ろう。我は汝の其の煩惱に縛られて居る様を哀れみ、其の汝を助けずば正覚は取らぬと現われた、汝を救いの親なるぞ」と、これを聞かせて貰つた一念に、私のよくいう

「あゝ能くも〜此の者を」である。大抵の者が皆ここで、頂きようが違つて居る。大抵の人が皆ここで「らくになろう、善くなろう、先きをあかるくなろう」と思うから間違うのであります。そうではない。

その私の、どうしても明るくなれない、善くなれ無い、悩みのやまぬ、動かれない、その心のどん底までを、大悲の眼より御覧下されて、人なら呆れて仕舞うところを、呆れもせず、益々その、頼り無き心中を察して、その汝が哀れて耐えられぬとの仰せなのである。

この具合は、恰も表門に人が来てると思うたに、計らんや裏門から来て居たと言おうか。又、今まで、前にある〜と前に求めて居たに、計らんや背後から、お慈悲の山が砕けて来たと言おうか。みんなが小さい〜お慈悲の缺けらを探して居るに、計らんや背後からお慈悲の大波にさらわれたという有様である。

我々は今言う如く、一分一厘善き事は出来ず、悪しき思いは止まぬ、実に虚仮不実の塊りである。我々の一切は、親も子も、夫婦も兄弟も、乃至健康も財産も、一つとして当てにならぬ。木に攫まれば木も砕けて仕舞い、草にしがみつけば草も抜けて仕舞う。もう落ちるより仕ようが無いと、悶えに悶えて、攫む物、攫む物、はたから皆砕けて仕舞う。最後にもう信心と、攫んだ信心までが砕けて仕舞う。その仕て見よう無き様を御覧なされて、その者のために親が、斯く居るとの遣る瀬なき仰せなのであります。

十二、仏のお慈悲に引つくりかへる。

全体、私など苦しみた時は、もう御信心を頂こうとの思

いさえ無くなつて仕舞うて居た。御信心の方では、もう疾く^とに失望落胆して仕舞うて居たのである。

何故かと言うに、私など自分では、それまで長い間、御信心のため骨折つた、宗教のためにも尽して来た。とそう思うていたのが、それが皆駄目になつて仕舞つたのである。其処で「もう自分は仕ようが無い、もう自分は駄目だ。もうここに誰かひとりこの自分の苦しき心中を、如何にも苦しかりうと、察してくれる人は無かりうか。もう死ぬより外仕ようの無き此の身、頼るべき処は、今は一切無いが、誰か斯くなり果てた此の身を、哀れ、可哀想だと言つてくる者は無かりうか」と。

人間の最後はもうこの一所なのである。ここになると、もう攫もうにも、しがみつかうにも、攫むべき、しがみつくべき物さえ有りはせぬ。

処へ仏の遣る瀬なき仰せを聞かせて貰うと「仏かねてしるし召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたる事なれば云々」……私共が、かく弥々となれば、一分一厘動かれざる煩惱具足の身なる事を、仏はかねて知ろし召して

「汝がそこを自分で自由に動かれる位ならば、本願の手を籍りなくともよい。汝は如何ほど行く先を明るくならうと思つても、なれぬだろう。汝、何程自由に動こうと思つても、自由に動けぬだろう。汝の心持ちは頼り無い

だろう、空虚だろう、充実せぬだろう。」

と、……能く今日は、空虚という言葉を用いられる方がある。その頼りすくなき空虚の有様を哀れみて、その者を飽くまで捨てさせ給わぬお心と聞く時は

「あゝ能くも〜これ程空虚な仕て見よう無き者を、これ程、不真実な、うそ偽りの私を、こ奴を哀れみて、見捨てぬお慈悲でましますか。私共これまで長らく苦しみて堪えられなかつたは、もう自分はこんなつまらぬ者故、誰だつて呆れて相手にせぬだろう。もう自分の如きして見よう無き者は、道は無いと、夫ばかり苦しく思つて居たに、計らんや仏は、この者を呆れず、此の罪惡極まる私を見捨て給わぬお慈悲でましますか。」

と、之を聞く時は、もう外の事は無い

「弥陀五劫思推の願をよく〜案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を……すけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」と、ここで今までのそくばくの業が、仏のお慈悲にひつくり返つて仕舞うのである。この引つくり反る処が無くてはならぬのであります。

十三、「こんな事では」の思い。

今日大抵の人の仰言るのが「自分如き浅間しき、こんな事では」

と、ここで皆、つき当つて仕舞つて居らるのである。先日も或人が、未だ法を聞かれたことのない或る実業家の方に聞かせたいからとの事にて、行つてお話しした。すると御主人、御兄弟の衆が、膝をつき合はせて熱心にお聞きになる。して言はるるには

「私はこんな悪しき心の者を、これを助ける、これを救うとは、どうしても分らぬ」と言われる。で私は其時申した。

「実にあなたはよい処にお気づきになつた。実にあなたが、こんな事では」と言われるのは尤もである。併しながら、茲に驚く可き事は、私は今あなたがそう言われる、其如き者、……今あなたが、こんな事では」と衝き当りて動けぬ、その仕て見よう無き其処を哀れみて、その自ら卑下せねばならぬ程、夫れ程悪しきを呆れず、悪しければ悪しき程、いよ／＼見捨てられぬとある。広大のお慈悲である。

仏のお慈悲は、決して悪しくともよいと言わるるのには無い。去りながら、何程あなたが、これではいかぬから、善くせねばならぬ／＼と思われても、此の以上は衝き当りて仕て見ようが無いであろう、そのくくられ、動けぬ処を私は、あゝ哀れである、尤もである、その仕て見よう無き事を我はかねて知つて居る、その心淋しき心

悲の深きに、疑えず、双向おうとしても、其の御親切の遣る瀬なきに双が立たぬ。

「あゝよくも／＼此の者を」と「弥陀の誓願不思議に助けられ参らせて、往生をば遂ぐるなりと信じて」で、此の御哀れみの遣る瀬無きに気がつく一念、向う様のお慈悲の深き一つで、此方が助けられて仕舞うのであります。

で、いよ／＼御慈悲頂く時の味わいは、先きにも申した如く「あゝよくも／＼」という心持ちである。たび／＼繰返す事なれども「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、……本願の添けなきよ」……よく／＼弥陀の本願を頂くに、此の悪しき、そくばくの業を持ちける奴にてありけるを、あゝよくも／＼である。又いよ／＼死ぬるとなる時、矢張り何としても死にたくない、死にたくないによりて、

「まことによく／＼煩惱の興盛にそろうにこそ」

実に此方は煩惱の切り無し。何処までも罪業の塊の奴である。その悪しきを私は、よくも／＼呆れもし給わずして其の者の為に御成就下された本願と聞く時は、最早言うべき言葉も無い。「あゝ有難や、南無阿弥陀仏々々」と、茲を『歎異鈔』の第一章には

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて……

中を、我は疾うから察して居る。そのため我は如何にしても汝が捨てられぬのであるぞとある長々御苦勞の形が、実に五劫思惟、兆載永劫の修行の有様である」

十四、一念の味わい、——歎異鈔第一章

こは御存知の如く、『大経』で法蔵菩薩の御苦勞をお説き下さる処にも

「欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず、欲想・瞋想・害想を起さず、色声・香味・触法に着せず、忍力成就して衆苦を計せず、少欲知足にして、染・患・痴無し。三昧常寂にして智慧無碍なり。虚偽、詭曲の心有ること無し。和顔愛語して、意を先きにして承問す。云々。」

とあつて、斯く仏の長々の御苦勞は、此の見捨てられぬ心一つより、常にこの優しき心を以て私に向うて下されたのである。

此方が貪欲の心に、私は無欲の心をもて向い、此方が愚痴の奴故に、私は其者に常に智慧を以て向うて下さるのである。かく、此の仕て見よう無き者が見捨てられぬばかりに、私はかく如何にも、優しき、如何にも広大なる遣る瀬なきお心をもつて向うて下さるお慈悲と聞く時は、私として悪しき性分の止む奴では無けれども、この御見捨てなき御親切、お慈悲の下に頭が下り、疑おうとしても其のお慈

何が不思議かと言うに、斯程までに、よくも／＼見捨て給わぬ本願が不思議である。其の本願に如何なる訳のおわしますかは知らねども、この仕て見ようなき私が、其の誓願不思議の釣に引つけられ、往生をば遂ぐるなりと信じて、

……念仏申さんと思ひ立つころのおこるとき、即ち撰取不捨の利益にあづけしめ給うなり。

今日まで称えて居た念仏は、此方から仏を攫まえよう、此方から仏にしがみつこう、とする南無阿弥陀仏である。然るにこの仕て見よう無き私のために、それ程昔から待ち受けて下されてあつた広大の御まことを聞かせて貰うと

「あゝよくも／＼それ程までの遣る瀬なきお慈悲であつたか」

と、その誓願不思議に助けられ参らせ、往生をば遂ぐるなりと信じた一念に、今までのものがく思ひも、しがみつく思ひもおのずから皆とれて、自然に念仏申さんと思ひ立つ心が起り、自然に称名が口に浮んで下さる。その浮んで下された念仏は、はやすでに、御恩報謝の念仏である。茲は『歎異鈔』又のお示しには

信心定まりなば、往生は弥陀にはからわれまいらせてすることなれば、わがはからいなるべからず。わるからんにつけても、いよ／＼願力を仰ぎまいらせば、自然のこと

わりにて、柔和忍辱のころも出でくべし。すべてよろずのことにつけて往生にはかしこきおもいを具せずして、たゞほれくんと、弥陀の御恩の深重なることをつねにおもいだしまいらすべし。しかれば念仏も申され候。

これ自然なり。わがはからわざるを自然ともうすなり。これすなわち他力にてまします

ともありて、此の仕て見ようなき私を、飽くまで捨てさせ給わぬ誓願の不思議と頂く時は、自然に、南無阿弥陀仏、々々々と口を衝いて念仏が現われて下さる。この現われた念仏は、はやすでに報謝の念仏である。

その「念仏申さんと思ひ立つ心のおこる時、即ち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり」……其の念仏称えんと思ひ立つ心の起つた時は、はや既に撰取不捨の御利益に預つて居るのである。という、これが、即ちお助けに預つた一念の極促であります。

十五、解脱の意義

而して其の一念の味わいにつきては、連如上人「御一代聞書」には、或人「一念に御助けありたる事の有難さよと念仏申す可く候や又御助けあるうずる事の有難さよと念仏申すべく候や」との問に対して、蓮如上人は「何れでもよい、但し一念に頂いた正定聚の上より言う時は、既に助かつて居るのであるから、御助けありたる事の有難さよと

を断絶す。故に断と曰うなり。四流とは則ち四暴流なり。又生老病死なり。

全体我々は、お助け／＼と仰うのであるが、何をおたすけかと言うに、このお慈悲頂く一念に、今までの六趣四生の因亡し果滅し、頓に三有生死を断絶して、これまでの迷いが断たれるから、お助けなのである。解脱というは実に茲なのであります。

でこのお慈悲頂くと、ここで今までの考は総て「あゝ馬鹿らしかつた、あゝ申訳け無き事思うて居たか」と、ここで一辺に引つくり反つて仕舞うのである。

何うかいふに、今日迄、喜ぼう／＼としても、喜べなかつたは、矢張り、喜びという綺麗な、殊勝な心持に成り度かつたのである。

爾るにお聞かせに預つて見ると、其の喜べ無い、殊勝になれぬ、この一点善き処無き身の上を哀れ可哀想とお見捨て無きお心と承り、南無阿弥陀仏、々々々と頂いて見ると、今までの「喜び度い、善くなり度い」の思ひはすつかり、捨て仕舞い、今迄の「あゝ仕度い、こう仕度い」の思ひが、其処でガラリとらくになつて仕舞うのである。又現在頻死の境に迫つて居りながら、どうも死に切れず、死ぬる／＼と悶えて居る。その死ぬる身を仏の方より先に知らし召し、其の者を見捨て給わぬ親様と承るなり、死ぬる身

喜ぶ意である」とお示し下されてある。

これは御同様、一度このお慈悲頂いた一念の上からは、もう迷われぬのである。撰取不捨の御利益というは、遁げようとしても、其者を光明中に捕えて遁がし給わぬ、とお知らせ下さるが茲である。

親鸞聖人「行巻」のお示しには

爾れば真実の行信を獲る者は、心に歡喜多きが故に、是を歡喜地と名く。これを初果に喩うることは、初果の聖者睡眠懶墮なれども、二十九有に至らず。……

自力の修行で行かれた初果の聖者と雖も、如何に睡眠懶墮なれども、再び二十九有の迷いに陥込むことは無い。……如何に況んや、十方群生海、斯の行信に帰命したてまつれば、撰取して捨て給わず。故に阿弥陀と名く。これを他力と曰う。

と。即ち一たびこの仏のおまことを頂けば、其の一念に撰取不捨の光明中に納められて、もう如何なる事ありても外へは行かれぬようになるのである。故に聖人は又この一念に「横ざまに四流を超断する」ともお知らせ下された。

「信巻」にはこの断四流の味わいをお説き下されて、断と言うは往相の一心を發起するが故に、生として当に受くべきの生無く、趣として応に到るべきの趣無し。すでに六趣四生の因亡し、果滅す、故に即ち頓に三有生

は矢張り、何処までも心淋しき思ひは離れねども、それが何うなるうが斯うあるうが、すつきり遣る瀬無く御心配一つに打ち任かせて、何時の間にやら、久しく沈んだ生死の心配が解けるのである。

然らばこれを正面より言いて、心淋しいのが淋しくなくなるのか。何か行く先が自分で明らかに見えるのかというに、然うじや無い。其心淋しき、仕て見ようの無い、真暗な心中が、それを哀れみ給わる此のお慈悲一つで、充分満足させて頂けるのであります。

して「今日まで、この遣る瀬なきお恵みでましますしに「あゝ、こう」と自分の方より思ひを運んだが、申訳なき間違ひであつた。今日まで、此の不自由なる奴が、どうか思うように繫縛が取れぬかと、そればかり久しく悩んだに、計らんや、其の思うようにならぬ奴故、其処を哀れみて、捨てさせ給わぬお慈悲でましますし」と頂き、又、今日まで、死ぬる／＼と死を恐れた者が、時來れば、何と言うても死なねばならぬことを知らされ、而もその者が、捨てさせ給わぬお慈悲一つに充分満足して、らく／＼と其繫縛を解かせて貰えるのである。

茲が今日題に申した目夜三惡道に繫縛されて居る者が、仏のお慈悲一つで解脱を蒙るといふのが、これなのであります。

而してこの広大のお慈悲でまします故、これまで分らぬ
／＼と言うて居られた人も、この思召しを聞くなり、「今
日まで、あゝこうと、何か分つて頂く信心と思ひしに、こ
の何うしても分らぬ、何時までも死にたくない、この罪惡

深重の奴を捨てぬとの遣る瀬なき仰せなりしか、さてさて
有難や」と、此の仰せ一つで皆喜ばるのである。常に申
す『數異鈔』の二章のお示しもこれに外ならぬのでありま
す。

善知識を訪ねて

福島政雄

それから次の善知識であります、又南の方で遍無垢、
あまねく穢れが無いというのであります。そう云う所に海
幢比丘という、これは出家の修行者であります。その人を
善知識として勤めるのであります。善財童子はその海幢比
丘を探し求めて行つたのであります。これ又林であります
て、そこに海幢比丘の姿を見るのであります、それはそ
の林の中を歩いて居る、それから又縮跣坐する、自分の
体を正しくして正しい事を念じ、そして出入の息を離れる
と言うのでありますから、自分の息を私共は感じている事
が多いのでありますけれどもその息が本当に静かに安らか
になるとそれがこの「出入の息を離る」と云つております

所でありましょう。そういう有様で何とも云えない不思議
な広大な三昧にはいる。その三昧の力を以て大神通を現わ
し体の各部分から色々の雲が現れて来て居るといふのであ
ります。そして貪しい者を救う、病氣をしている者を救う
事を始として一切の衆生の煩惱の熱と言うものを除いてい
る、そうして一切の衆生に悟を開かせている、その他色々
の利益を与えている。そういう姿が見えるのであります。
それから著しい事はその海幢比丘の目から「無量百千の広
大の日輪を出し」となつて居りますから、沢山の太陽が目
から出ている、そして大光明を放つて「普く一切の諸大地
獄を照す」となつていますから、その目から沢山の太陽が

出て地獄の底の底までも照している。そうすると地獄に居
る者がその苦しみ悩みが皆無くなる。又餓鬼の世界もその
様にして救うている。だからあらゆる衆生の心地を涼しく
させて居ると。

きな表現をしてありますけれどもなか／＼いゝところであ
ると思うのであります。

どうでありましょう。目から沢山の百千の広大の日輪を
出しという処はどうでありましょうか。その目の働きのい
うものも如何なる衆生の苦しみの底までも徹してい
る。それを徹底的に見て行く目の力があるのでありますよ
う。成程そう言われてみますと私共日常生活ではのかた経
験が無い事はありません。眼は一番ものを云うのでありま
して、人に会うて向うの人の心持は目で直ぐわかる、何と
も言葉を出さない前にこの人は自分に好意を持つてい
るか、あんまり自分をよく思つていないかという様な事は目
を見るとわかるという事は、私共経験します事でありま
す、その目が非常な力を持つていて地獄の底までも徹す
る。その目を衆生の方から云えば、その目の輝きのお蔭で
自分の苦しみが無くなる。それは私共多少心に思い当るの
であります。自分が非常に苦しんでいる時に自分が本当に
信じて居る処の広い温かなお方の目でジイツと見られる
と、見られるだけで自分の心が柔いで行くという様な事は
私共多少の経験は持つ事であります。そういう一々の徹底
的な事をこゝでは言うてあるのであります。非常な大

それからその比丘の頂上、頭の上から微塵数の如來を出
す、沢山の仏様が現われておいでになる。そしてその如來
の一切の働きがそこに現われる。それは目に現われたとこ
ろの如來の心が目を通して徹するのでありますから、頭か
ら微塵数の仏様が現われておいでになるといふ訳になるの
であります。そしてそういう三昧の結局のところは、
十方の一切の世界は何の礙にもならない。地獄の底の底ま
で徹するのでありますから、如何なるものも海幢比丘の三
昧の境地の前には礙になるものは何も無く、地獄のどんな
苦しみでも礙にはならぬ。こういうところでありましま
す。これは般若波羅密清淨光明三昧法門と云つてあ
ります。この三昧の世界に現われるところを善財に感ぜし
めて自分はそういう法門をわかつて居るだけであると言つ
て、その次の善知識を教えてくれるのであります。

その次は又南であります、田滿光城というお城に妙日光
王といふ王様がある、その王様の夫人に伊舍那優婆夷、優
婆夷は在家の婦人であります。そういう善知識があると教
えるのであります。で、善財童子は又善知識の教又言葉、
行、心を深く念じまして善知識というものは自分の眼目
である、自分の目の様なものであるという事を心で思いな

がら、だん／＼と南の方にまいるのであります。そして今の円満光城というお城の東にまいますと普莊園ふしやうえん、あまねく立派な園であります。その普莊園と云うのが何とも云えない美しい宝樹がある。それから様々の鳥の声は天の音楽の様に聞えて来る、百万の大菩薩達が始終その道場に参つて居る、そして今の伊舎那という夫人は立派な人の姿を具え、そして真金座しんこんざというのでありますから金色の座に坐つて居る。ところがその優婆夷、その婦人を見ると、体の病も心の病も色々心に纏つて居る困つた事、一切の邪見、色々の心の障さわりや執着まじ、色々の惑まどいや苦しみというものが皆除滅される。そして一切の諸仏の教の海に通じて行く。そちらに達する。

これは又なか／＼の女性であります。華嚴經の善財の善知識の中には何人かの女性が現われて来るのであります。これは最初に現われて来る女性なのであります。そうすると善財は普莊園と云う園の中にはいらまして、今の伊舎那優婆夷うわはいに見える。そして例の通りに菩薩の行を尋ねるのであります。その時に伊舎那は善財に告げてこう云う事を言われます。

「善男子よ、私は菩薩の一解脱を得て居ります。絶え間無くその修行をして習つて居ります。若し衆生があつて暫くでも自分の体を見る、自分の名前を聞く、或は自分の説

く所の法を聴く、或は私を心に憶おもう、或はこの私と一緒に所に住居する、そして自分に親しんで来ると、自分の方から如何なる衆生でも見捨てない。なおざりにしない。そして必ず自分に近づいたその事はいたすらごとにならない。無駄事にならない。」

こう云う事を言う。そうしますと、どうでありますか。この女性に遇つてその姿を見る、或は名前を聞く、或は法を聴く、或は一緒に住まつて自分に親しくしている、みんな無駄に終らないというのでありますから、つまり自分に接触して居れば皆仏の世界へ導かれて行く事になるので、と云う事を言うのであります。これは大した事であり、伊舎那は女性であります。女性であつてそういう事を言う。この女性は非常に立派な女性であります。見たばかりで仏の世界に導かれる、一緒に生活して居ると尚仏の世界に導かれる。こういう女性は私共考えて見ますとこの世の中に沢山は居ないのであります。併しこういう女性には必ずあるという事も感じますのであります。つまり男がそういう女性にあり、善財は男でありますから男が女性に遇つて普通おこす様な煩惱がおこらずに、自然とこの女性から何とも言われない清らかな世界に導かれて行く。そういう女性は必ずある。その女性の代表者であると言ふ事になります。

そこで善財童子は一体あなたは始めて菩提心をおおこしになつて以来もう久しくなるのでありますか、まだそう年月がたつて居ませんかと尋ねますと、この婦人は然燈仏ねんとうぶつという仏様とその他沢山の仏様の所で法を聞き修行したと言ふ事をこの婦人は物語るのであります。尚一切衆生の教化の為、又一切如来の誓願を満足する為に菩提心をおこすと

迷を恐るる或る青年に

波岡茂輝

悪人正機

洋服新調の事で迷い、その色合地質の事で迷い、附属品で迷い、更に収入のすくない事、父母の生活の貧しい事で迷う、それでは全く迷い詰めの生活です。よく／＼の凡夫人だといふより外ありません。まことに困つた事ですが、併し吾等は明らかに生死が離脱が出来、明らかに執着がなくなり、明らかに身の程が判り、謂わゆる大悟徹底、明鏡止水の境地に立ち、洒々落々の境界に到つたなら、決して迷うことも愚痴をいふことも無い筈です。然るに私共は煩

悩具足、迷妄不浄の身なので到底悟りきれないものです。

これは一生を終る最後の日までそうだろうと思われま

言う次第を非常に詳しく述べます。そして一切の世界を非常に厳きびかな清浄なものにすればそこで自分の願は満足するといふ事になります。この解脱の名を名づけて離憂安穩りやうあんゑんというのを離れてやすらかな、こういう解脱の名であります。こういう一つ一つの解脱を知つて居るばかりであります。

く御存じなのです。それを御存じの上で極楽往生させ、成仏させてやるとの弘誓なのです。だからその仏陀の我等に対する御約束を信じさせれば、迷があつても、執着我慢の心があつても成仏し安養世界に行くには差支がありません。又仏陀の願力は絶大無限であるから、我等の煩惱が、どんなに執拗でも頑固でも安心なものです、少しも心配す

ることはありません。

なんとも度すべからざる煩惱が自分を束縛していることに気付いた時、仏陀を仰ぎなさい。そこに救の力が輝き抱擁の手が差し延べられていることを発見しましょう。煩惱があつて困ることを感ずるのは信仰が無いためです。実は煩惱は仏陀と我々とを結ぶ橋なのです、煩惱は感謝を引出す鍵なのです。煩惱の撞木が大きければ大きい程、大悲の鐘の響も大きいのです。君もいくら煩惱が興盛でも一向困ることはありません。「こんな不束な自分をも往生させ、人間中の第一人者として下さるのか」と感謝すべきです。煩惱は無くそうたつて、もとくゝ悪業の根強い吾等凡人には到底不可能の事です、本願を信じさえすれば無くそうと考えなくても疑もなく仏になります。そのまま結構なのです。

「歎異鈔」がしつくり水解出来なくて困るとの事です。それも判らんなら判らんでよい。「歎異鈔」は何も信仰の源泉ではない。「何も彼も判らない、知らない、本を読んでも人の様にハッキリと理解が出来ない。それで差支がない。さうした罪悪の人、迷妄の人、暗愚な人を救うのは仏陀の本分であるから、仏陀にまかせておけ」と述べてあるのは「歎異鈔」なので「歎異鈔」が判らんでも「このままの救」さえ判ればよい、即ち念仏すればよいのです。信仰

病人になろうというではない、避けられるだけ避けようとするのは普通人と変りがないが、さりとて強いて拒避もしない。来るものは悉く絶大な心、不思議な力の中に融和させて恰も葉籠中のものにしてしまうのである。そして周囲のものから全く解放せられ、何等の執着もなく、迷うこともない。廓然として外物にこだわらず、その進退は丁度「鳥飛んで空中に跡を留めず、魚游いで水中に路を残さぬ」様に一点のギョチナサもない、まことに玲瓏たる一大信念なのであります。

念仏のおまかせの心、はからいのない心はこの大信念と合致している。但し禅の悟道の知的要素を多方に含んでいるに反し、念仏の信仰は感情的要素を多方に含んでおり、又禅は超人間的な傾があるに反し、念仏は人間的である差があるが、廣大無辺の仏陀の慈悲に摂取されるのは円融無碍なる本来の面目に安住すると少しも変りがない。前者は自然法爾と言ひ、後者は無為寂滅と言ひ、蓋しシノニムに過ぎない。

運 扱 念 仏

唯私は禅によって正式に参究工夫していかない。曾って少しく禅の提唱を聴聞し、老師と多少の間答をなし、自分で禅書を涉履し、冥想思索したに過ぎない。念仏に就ても略同様であるが、自分にとっては個性、機縁の然らしむる処

の源泉は仏陀の慈悲にあるのです。

念 仏 と 禪

念仏を禅的に見れば「そのままを受け入れる」ということになる。禅は教えて言う。

「外界の事情でも自己内部の有様でも、そのまま受け取れ、例えば茶が出たら茶を飲み、飯が出たら飯を食ひ、寒ければ着、熱ければ脱ぐが如く、富でも貧でも、賢でも愚でも、晏如として受け入れよ」と。

かうした行動の根柢には安んじて受け入れるだけの信念がなければ克くする事が出来ない。即ち悟道の心境に達した人でなければ出来るものでない。

だから「そのままに受け入れる」という事は決して、仕方なしに、止むを得ず、いや／＼ながらなどという愚痴でも、泣き寝入りでも、諦めでもない。「知足第一の富」という事があるが、そのまま受入れることには大なる愉快、大なる安樂が伴わねばならぬ。寂しい苟合、惨めな妥協ではない。普通なら貧・愚・病・死などいうものは、決して好ましいものではないのであるが、大海の百川を容るる如く、あらゆるものを摂取して洒々たる心には無限の大き、無辺の広さがある。その心こそは自分の據処でもあれば、愉悅の源泉でもあるから、貧賤・凡愚・病患などには心がドン底まで動揺させられない。もとより好んで貧賤・凡庸

か、罪惡深重、煩惱熾盛、余りにも人間的な凡庸暗愚な私、いくら理想を追うても実現する処か、却って背反せる私、これでは一生かゝつても人間以上に出られない、即身成仏などはとても及びもつかない身である事が、中年にして漸く判り、始めて念仏した。君も私と個性に於て一脈相通うものがあるかに見受けられるので禅と念仏とは、究竟を一にする事を述べて、弥陀の慈光に光被せん事を念願してやまない次第である。

なほ禅は難行で念仏は易行だというが、成る程六字の名号を唱えさえすれば足るのだから頗る易行である。併し中々その六字が唱えられないから易行でもない。人によっては禅も念仏も等しく易行であろうが、吾等凡愚にとってはいづれも難行だ。なまやさしい決心では悟入も獲信も出来はしない。公案が解けたとて信仰を獲ているとは限らない。

先づ真理をつかみたい熱望、最高至上の人格者になりたいたいあこがれに出發し、追求又追求、或は倒れそうでも猶理想の実現に邁進する間に、本能の勢のいたづらに強く、意志の力の余りに弱きに呆れ、我慢の刀折れ矢尽きて、自力の城を明渡し、ここに始めて仏陀の慈愍に飛込み、無辺の光明に浴し、本願を信頼せねばならなくなる。

一方、禅には数千の公案あり、これを一々透過せねばならぬという法式は、今日一般のやり方である。而もこれに

要する時間は、この道ばかりに全力を傾けても少くとも十年の長きを要する。猶ほ禪には古来仕来りの行儀作法があり、俗人には容易に齒が立たない。これのみですでに難行である。其上この難行は遠心的で、外向的な概念的な事に流れ易く、中々自己そのものに還つて来ない。それでは只の禪の知識人で自分は依然として情識の凡夫、転迷開悟は全く覚束ない。世に「禪天魔」と言うのはこの類である。入信、悟入いづれにしても難中の難であるが、畢竟は同じ高嶺の月を眺めることは前述の通りである。然らば人間としての実生活の上には、又活社会の中で得られる念仏こそは吾等の選択すべき道であるまいか。

むすび

煩惱の凡夫を助け給はんとの本願である。「如何なる悪も怖るべからず、本願を妨ぐる程の悪なきが故に」との親鸞聖人の仰と思ひ合して、迷いが多くとも何も怖るることはない。むしろ省みて煩惱の熾盛なるを知らば大悲のかたじけなさに感謝すべきである。

大無量寿経に、釈尊は頌を説いて大衆に誨え給うた。

「たとい世界に満てらん火をも、必ず過ぎて、もとめて法を聞かばかならずまさに仏道を成じ、広く生死の洗れを濟すべし。

と。至心に精進しましょう。

(一一一、一一一)

雲霧と曉

(一)

神原徳草

聖人の八十三歳の御製作になる「尊号真像銘文」の中に聖人は大無量寿経の中の第十八願の御文を精しく御味い下さつて書き残してくださるのを始めとして、祖師方の銘文を御親切に説きあかし、それから終りの所で御自身の正信偈を引用されて「愚禿親鸞正信偈にいわく」と書き出されています。これはまことに変わること、御自身の正信偈を平然と釈迦牟尼佛の説かれた大無量寿経中の阿弥陀佛の第十八願や祖師方の銘文と同列にかき出される聖人は一体どんな御気持であろうかと、こゝでちよつと行き詰つてしまします。第十八の誓願、王本願を出され、源信僧都、御師匠法然上人、法友の聖覚法印と出されてこんどは平然と御自分の正信偈を出される。これは吾々には驚きであります。蓮如上人も御身の作られた御文を御弟子に読ませて「自分が書いたものだが如来さまのお慈悲はまことに有難い、よくかけている」と自らの御文を自ら賞めていられる。これも驚きであります。しかし、つまりは、佛法は佛法であつて私有物でない、御慈悲の御念佛は親様の御廻向

良寛和尚の歌

われながらうれしくもあるか弥陀仏のいますみ国に往くと
思えば
わたしにし身にしありせば命よりはかにもかくにも弥陀の
まに／＼
かにかくにもものな思ひそ弥陀仏のものと誓いのあるにまか
せて
おろかなる身こそなかくうれしけれ弥陀の誓いにあうと
思えば
水の上に数かくよりもはかなきは己が心を頼むなりけり
心もよ言葉も遠くとどかねばはしなく御名を唱えこそすれ
不可思議の弥陀の誓いのなかりせば何をこの世の思ひ出に
せむ
草の庵にねてもさめても申すこと南無阿弥陀仏々々々々々々
良寛に辞世あるかと人間わば南無阿弥陀仏というと答えよ
極楽にわが父母のおわすらむ今日膝下に行くと思えば

であつてわが口より出てもそれは私の出したものでなく、御廻向のお念佛が表われるのである、すべて本願他方の御はからいに外ならない、そういう御心だから酒々落々と「愚禿親鸞正信偈にいわく」と出されるのではないかと思われます。翻つて、吾々には、橋漫か卑下慢、自他の別か、それらが地から生えているのですぐそのまゝに通つてこない、誠に歎かわしいことでありまが事実であります。聖人は、常に如来の声をきいてそれを述べておられる。教行信証六軸の御本典も「釈愚禿親鸞述(のぶ)」とお書きになつて「作(つくる)」と書かれぬ。自分から送り出した言葉でなく如来様のお声が写るまゝに綴られ、それがそのまゝ、教行信証となり略文類となり和讃となり尊号真像銘文となる。せつせと如来のお声が聞こえたと書きのこされる。だから御本典の行巻の時に聞かれた如来の御声が「正信念佛偈」であれば、こんどは聖人八十三才になられたときに如来から聞かれたお声が尊号真像銘文となる、その中に聖人曾てきかれた如来のお声が「愚禿正信偈にいわ

く」と述べられてくるのであります。

さて銘文に聖人が正信偈を引用された中で、

「撰取心光常照護」というのは、無礙光佛の心光つ

ねにてらしまもりたまうに、無明の闇はれ生死の長き

夜、すでに暁になりぬと知るべし。

「已能雖破無明闇」というはこの意なり。信心を得れば

暁になりぬと知るべし。」

と仰せられて居ります。そして次に

「貪愛瞋憎之雲霧、常覆真実信心天」というのは、我

等が貪愛瞋憎のくも、きりに譬えたり、貪愛のくも瞋憎

のきり、常に信心の天をおおえるなりと知るべし。」

とあります。

私は久しくこの「暁になりぬと知るべし」の暁という御

言葉に氣をつけて参りました、いつのことだつたかこの聖

人の暁という御言葉に氣をとられたのであります。その時

の感じは、まあ何とすが／＼しいお言葉だなというのであ

りました。

こゝで暫く私に文芸的な迷いを許して頂けば、暁の清爽

淨徹の感から、そのまゝ聖人御一生の暁のひとときを冥想

したりするのです。或は御年九才の春三月のある夜、慈鎮

和尚の下、東山の青蓮院で落飾される。「あすありと思

心のあだ桜夜半に嵐の吹かぬものは」と夜に灯火の下で

落飾される、どんなお心でその夜は眠られたらう、そし

て暁の頃フト眠りからさめられた可憐な暁の聖人。又は比

叡山で堂僧として念佛行を励まれたある暁の聖人。礪永の

廟窟での暁、六角堂満行の暁、北陸辺地御流罪の時の暁、

稲田の御草庵で教行信証をおかきになつていられる或る暁

の聖人、太師堂などで唯円房等と談り明かされた大聖奉讚

の暁の聖人。晩年御掃路の後、覚如上人の御伝鈔の御文に

よれば「聖人故郷に掃りて往事をおもりに、年々歳々夢の

ごとし幻のごとし、長安洛陽の柵もあとをとどむるに嬾し

とて、扶風馮翊とどころに移住したまいき、云々」と

あるが、この頃の、御和讃や銘文をかゝれるときのある暁

の聖人。思いを御一生にかけて暁という感じから幻想をこ

らしてみようと、又格別の深い感銘を覚えてくるのでありま

す。しかしこれは暁といふ言葉の感覚からひき入れられた

勝手な迷妄にすぎませんが、このような聖人を想像してお

いて「暁になりぬと知るべし」再び又「信心を得れば暁に

なりぬと知るべし」の御言葉を拝すると、何とも云えぬ清

らかさ、透明感、一口に清浄という感を深くするのです。

聖人には御夢告があります。康元二歳二月九日の夜、寅

の時の御夢告は和讃、聖徳太子からの御告げときかされま

すがこれは午前四時頃であつて暁の御夢告であります。

弥陀の本願信すべし 本願信するひとはみな

撰取不捨の利益にて 無上覺をばさとるなり

康元二年といえは聖人八十五歳の御時で、お念佛を法然

上人から面授口訣されてから久しい年月であるのに、なぜ

太子が暁の御夢に立たれて「弥陀の本願信すべし」と告げ

給うたのでありましょう。私にはまだわからないのであり

ます。暁というお言葉を聖人についてあれこれと考えて見

るのですが、弥陀成佛の御和讃にも出て参ります。

智慧の光明はかりなし 有量の諸相こと／＼く

光暁かむらぬものはなし 真実明に帰命せよ

こゝには「光の暁」と仰せになつています。阿弥陀如来

の智慧の光明は無量（はかりなく）、そのはかりなき御光

が有量（はかりある）もろ／＼のすがた、我等の煩惱の根

元を断ちきつて御浄土へ参らせて下さるのであります。す

ら、いかに多くの煩惱業報に悩まされて居つてもそれは

はかりなき如来様の智慧光のはたらきに撰取不捨と、おさ

めとつて下さるからして有量の諸相であります。吾々には

手に負えぬ重荷が、佛智の照耀するところ、名号一つの本

願力の御廻向によつて、光の暁をかうぶらぬものはない。

池山先師は「光の滝を浴びる」といわれて居ります。量り

なき光明、真実のひかりを浴びるものは、今まで闇の夜にわ

が計らいの小さな灯明を手にして、是非善悪に肩を怒らし

声を大にして瞑り憎みしている己が姿に、氣がつくのであ

ります。まことの光明に遭つて、はじめて虚偽の灯明が照

らし出されるのであります。

も一つ、これは白井先生に教えられた「暁」ですが、聖

人の「略文類」の中の「念佛正信偈」の中に、

弥陀の佛日普く照耀す 己に能く無明の闇を破すと雖も

貪愛瞋嫌の雲霧 常に清浄信心の天に覆えり

譬えば日月星宿の 煙霞雲霧等に覆わると雖も

其の雲霧の下明にして闇無きが如し 信知するに日月の

光益に超えたり

必ず無上浄信の暁に至れば 三有生の雲晴れ

清浄無礙の光耀朗らかにして 一如法界の真身顯わら

とあります。こゝに「必ず無上浄信の暁に至れば」と仰せ

になるのは御浄土のことを仰せになるので、そこは雲一つ

ない清浄無礙の光の境界である、一如の境、無量光明土で

ある、法身の顯わるゝ世界である、これを暁に至ればとい

われたのであります。しかしこの暁も、「信心を得れば暁

になりぬと思ふべし」との暁、この土における暁とズツト

つながつた暁であつて、御浄土の光明が南無阿弥陀佛とこ

の土にうつり映えてくるこの土の景色と、こちらから彼の

土を望んだ暁の景色との違いと云えるのであります。

正信偈私解 (十四)

— 序記 親鸞聖人の生涯 —

白井成允

既に二十年あまりも其処に住み、内には「教行信証」の稿を進め、外には念仏の御同朋たちの数を増して、家庭的にも数人の子女を育くみ、社会的にも一つの教団を導くような勢が漸く熟してきた常陸を去つて、御齡六十余歳の頃祖聖は故郷京都に帰られた。

何故に帰られたのであろうか。その動機を告げる言葉は祖聖の遺文の中からこれを見出すことが出来ない。私共はただ之を臆測するにとどまる。臆測の中に最も力強く私の心を引くものは「教行信証」の完成ということである。それについては前号に述べたのであるが、但だこれは単に一部の著書の稿了というだけの事なのではない、少年の日からひたすらに求め来り、先師法然上人に遇いて知らしめられたまうた、生死出づべき絶対唯一の道を明らかにして広く同朋を安んぜしめる事である。念仏往生の教が釈迦牟尼よりこのかた三国の高僧たちに一貫せる最勝無上の道なる

を証して、先師の遺教の真実義を顕わならしめる事である、己れの今生一期の寿命をささげて先師の厚恩に応えてまつる事である。末代の同朋の苦惱に同悲して永しえに安樂ならしめんとする事である。先師の教が都にありても辺地にありても種々に誤まり伝えられ、或は其の流通が公に禁ぜられ、甚だしきは御墓があばかれる等、悲しむべく痛むべき時運に面して祖聖の「教行信証」の完成の志願はいよいよ堅く、文献を探るに難き辺地に留まるを許さざるに至つたのであろう。

同時にまた祖聖の御心の中には隠遁とも云わるべき念願の常に流れてあられたことが思われる。それは叡山にありて道を求めつゝ山上に流るる名利の世界を厭わざるを得ず、己の内なる貪愛の動きに泣かざるを得ざりし若き日から「われはこれ賀古の教信沙弥の定なり」と常に仰せ

○ られた (改邪鈔三) という晩年に至るまで、一貫して窺

れる事である。是れ凡そ偉大なる宗教的天才にとつて、常に離れることのできない性質であつて、単なる社会改革的活動に没頭する人々と遙かに様を異にするところである。

今、関東にありて念仏の信を伝うること二十年、その化よくやく熟して諸方に同信同行の教団が発生し交流してくると必然の勢として祖聖がそれら教団の首領として仰がれ慕われるに至つたであろう。素朴な人々から個人的に慕われ敬われることは或は人情の自然の交流として互になつかしみあうこともできよう。集団的に推されて首領とされることはどうしても厭わしく避けたいことである。其処では知らぬ間に煩惱の汚泥を深めるばかりである。もとよりそれによりて愈々大悲の光明を感ずることは切なり得るであらう。しかしどうしても「名利に人師をこのむ」ことを

洞観し慚愧せずにおられない天性の人は、必ず名利のまつわりがちなる境界から遁れ去らずにはおられない。これは人々各々の天性の自ら然らしめる所であつて、祖聖の如き天性の人には世間的権勢に余りに多く煩わされるような境界には久しく居るに堪えないのである、私は、祖聖が久しく棲みなれた関東を棄てて京都に帰られた動機の中に、このような隠遁の志ともいふべき念が潜み流れていたのだ、と思わざるを得ない。「われは是れ賀古の教信沙弥の定な

り」とはこの情念の流露であらう。それは「教行信証」の完成という自覚された志願の奥に絶えず秘かに、しかし強く潜み流れていたであらう。

入浴は恐らく六十二三歳の頃為されたのであろう。それは久しく恵信尼とも別れ、御子女たちとも別れ、ただ末の御娘(覚信尼)ひとりだけを伴いての事とばかり思われてきた。しかし新しい研究者たちは、主として恵信尼消息の委しい説解によりて、上洛は恵信尼や御子女とも別に為され、若干の時の間、一家京都に住まわれたのであろうと推測している。この推測に立つて読む方が恵信尼の文に親しいようである。

然し一家うちそろうて京都に久しく住まわれたのでもないようである。長ずるにつれて御子女たちは各の途に立ちて京都を去り、恵信尼も去り、常に父君の近くにありて御後の事までも護られたのは、末の御娘、覚信尼だけである。御一家の系図として学者たちの最も多く依つていれるものは、実悟上人の編んだ「大谷一流系図」であるが、これによれば、恵信尼には三男三女があられた。中について小黒女房・信蓮房明信・益方入道有房・高野禅尼とよばれる四人の方々は越後に住まわれたと思われ、慈信房善鸞には「依上人不孝無相統義」に註されている。末の御女覚信尼には最も委しい話があるが此には略く。恵信尼の遷られ

たのも越後で四人の御子たちの住まわれた諸地と近い地域にあられたようである。これ等は多く恵信尼消息の研究を通じて推考されている事である。

上の系図には、恵信尼を母とするこれら六人の御子たちの前に、「範意」という長男が録され、「大式阿闍梨、遁世改印信・母後法性寺撰兼実公女」と註されている。そうすると祖聖には恵信尼以前に内室をもたれ、一男を生まれた、とせねばならない。それでこの内室はおそらく早世し、恵信尼が継がれたのであろうとか、この内室を娶られたのは吉水門下にあられた時の事で、晩年の祖聖真蹟の中に「いまごぜんのは」として現われ、その子と推せられる「即生」が「印信」と誤記せられたのであろうとか、種々多様の臆測が学者の間に行われている。然し私は、上に述べたように、流謫以前に既に妻子をもたれたという臆測を肯うことはできないし、随つて「今御前の母」、「即生房」とよばれる人々をそれに擬することも出来ない。この人々に向つて祖聖が並々ならぬ親しい縁を感じておられたという事は明らかであるけれども、その縁を直ちに妻子のそれと認めることは余りに過ぎたる臆測であると云わねばなるまい。況して「撰攻兼実公女」と伝えられた人を、おちぶれてたよりもなく祖聖の胸を痛ましめた人と同一人と擬することはできない。だから結局この兼実公女を母とする範意印信という人の存在はこの系図の編まれた実悟の時

代の本願寺教団の勢の中に生まれてきた伝説の記録に過ぎないものと云うべきであらうか。これは玉日説話の発生以後の記録だからとして抹消して顧みない円梁法兄の説が真相に合っているかと思われる。

然しそうすると同一系図の一部を絶対に肯い一部を絶対に否むという恣意が支配するという恐れはあるまいか。そしてこの恐れはこの系図の中の慈信房善鸞を恵信尼の生子と録してある事に係わりて更に省みられる。

祖聖の御書簡の中に、慈信房が「壬生の女房」とよばれる人のもとへ手紙を送つている中に「ままははの尼に言いまどわされ」と書いてある、「不思議のそらごと」を写している、云々、という一節がある。これに依り恵信尼を慈信房の継母とする見方が長く行われてきた。然るに円梁法兄が、この伝承的解釈に反して全く新たに、継母ではなく実の生みの母である恵信尼を指して、善鸞が感情のもつれから継母という語であしざまに告げたのだと説き解いて以来、継母子説は棄てられて、実の母子であられたと信ぜられる傾向がまさつてきた。これは実悟の系図の改邪抄の所伝と合える部分を専ら採つてうちたてた説であるけれども、法兄の読み方にも疑難の免れ得ないものがある。「言いまどわされた」のは誰であるか。これを善鸞自身を述べたのでなく、父親鸞が継母に言いまどわされたのだと告げたのだと解く方が原文に親しくはないか。「不可思議のそ

らごと」というのも、実の母を継母と云つたという事を意味すると解くよりも、法門の内容について云えるものと解く方が適當ではあるまいか。後の語の解はともかく、前の語について、然らば父親鸞を言ひ悪わした「継母」とは誰であるか。恵信尼を指したとすべきか否か、これを問うていつても私には答えることができない。今の資料だけでは、すべてわがらない。臆測をいくら巧みにしてみても真相はわからない、と云う他あり得ない。

ただ明らかにわかることは、慈信房善鸞が父親鸞の信に背いて難行雑修の邪義を弘め、関東の御同朋を迷わしたために父子の義を絶たれたという事である。この事を委しく考えるためには祖聖の御書簡教通慈信房の行実等を顧みなければならぬが、これ周ねく知られた事であるから、ここにこれら資料を掲げることが略いて、ただ私の感想のみを誌す。

常陸において親しく祖聖の教化を蒙りて念仏もうした人々は、御同朋御同行として睦みあい親しみあい助けあい励ましあいつゝ漸く其の教団の勢を増していつたてたであらう。然し新しい団体的勢力の増すところには、純なるものばかりが動くのではなく、不純なるものの混入することも免れ得ない。特に祖聖の信の念仏の義の如き、これを如実に身に味わい行に証するは容易の事ではなく、其に到る途には幾多の疑惑動揺が経られ越えられねばならぬであらう。真実信心の人は少なく、邪義異教の徒の多い中に、同じ教団の内にも外にも諸の煩惱の渦をまきおこし紛擾をもちきたすことは避け得ないであらう、念仏の人々が諸の神仏を蔑

にするとか、ほしいままに悪を造つて顧みないとか、為に非難を蒙つて鎌倉に訴えられるとか、その訴えを受けて正信の念仏者の道を明し教団を護るとか、種々の渦巻のおこる最中に、慈信房善鸞という御方もまきこまれてしまったのではないであらうか。

善鸞は祖聖の御子として自然に関東教団に重き位置を占むべき勢を備えた人である。かなり久しく京都なる父君のもとにありて父君の育くみを受け教を聞き得たと思われた人である。恐らく念仏の人々の間におこつた諸の動揺などに係わりて父君の旨を受け、教を伝え動揺を休らわしめるなどの任を帯びて関東に下り、仍らいておられる間に、恐らく造悪無碍の邪義などに囚われた人々の有様を見るにつれ、修善堅固に傾く天性の焦燥を加え、大悲の願に徹する能わずして自ら難行雑修に陥るに至り、加うるに名利権勢に狂う人々の阿諛・追従・利用の的となり、いつのまにか父君の生命をかけて伝えたまう念仏の信義に背き、素朴なる御同行たちの心を乱し、遂に父君をして父子の義を絶つと宣べしめるに至つたのであらう。

これは祖聖の八十六・七歳の事であらうと推せられる。子を義絶せねばならぬ父の心の悲痛は想いにある。これを宜べたまうに係わる数通の書簡は泣血の跡である。ただ祖聖のこの決断によりて始めて私共は私共日本民族にいつこい一切難行雑修の迷信から度脱せしめられたことを思う。是れ日本精神史上容易ならざる重大事件である。

(八月七日。盛岡、願教寺精舎にて)

編集後記

九月廿六日、恰も洞爺丸遭難の日に空前の台風が本土を襲い、愛知、三重、岐阜に大きな爪跡を残して北上しました。瞬間風速四五・七米。屋根瓦やトタンが木の葉の如く飛散し、ガラスの破片は街を埋め、電気、ガス、水道、電話はとまり、低地には五・三〇米の高潮で海防堤が崩壊し河川の氾濫がひどく、水没、流失、倒壊の家屋、死傷者、不明者の続出、惰絶、悲惨を極めて言語に絶するものがあります。遭難、浸水、冠水地帯の人々、ことに誌友の顔々が点滅、去来し続けて居ります。十月十一日になりました。今日なほ通信連絡も思うにまかせぬ方々を思い心痛むばかりであります。

池山先生の二十二回忌を本年は十月廿五日(第四日曜)に催されることに決定いたしました。これは文化の日は障りの多い方がありますので昨年来決定された十月最後の日曜日であります。京都市右京区山田開町。浄住寺。京都駅より苔寺行バス終点下車。東南二丁目。新阪桂駅乗換、上桂下車南五丁目。波岡茂輝氏は岩手県の人。東大時代に求道学舎で近角先生から歎異抄を学ばれ、長年教育に尽精、昭和六年病氣退職。十二年病没。遺詠に
順も逆も唯一時の夢なりきつぎつぎ
人の死ぬるを見れば
名もあげず財もためず六十の齡を重ぬ今日も生きたり
窓近く植えし葉雞頭スリガラスの障子すかしてほのかに紅し
わが死にてたとえば石に名を鏤るも幾年へなば朽ちざらめやは
言うことはすべて愚かし生も死もただにわらいて黙すばかりけり

案内

△毎日第一、二、三日曜日、講話会。
午後一時半、一道会館。
△毎月廿四日午前午后、法話会。
市内昭和区小椋町、教西寺。
△十月廿五日。京都市、浄住寺。
池山先生忌。一道会。

定価	一部	二十円(送共)
	半年	百二十円(送共)
	一年	二百四十円(送共)
編集・発行人	花田正夫	
印刷	人本田政雄	
發行所	慈光社	
振替口座	名古屋一〇四七〇番	

慈光 第十一卷 第十号 昭和三十四年十月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和 二十四年七月二十三日 第十五日発行(毎月一回十五日発行)
三種郵便 便物認可